

第23回ごみゼロプラン推進委員会

日時：平成23年11月21日（月）13:30～15:30

場所：三重県合同ビル4階第1会議室

（開会あいさつ） - 略 -

（岩崎委員長）

皆さん、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

では、早速、議事のほうに入りたいと思います。

先ほど総括室長のご挨拶にもございましたが、今日の議題は二つであります。ひとつは、「ごみゼロ社会実現プランの進捗状況（平成22年度の取組）の点検・評価（案）」について、皆さんからご意見をいただきます。これは先ほどのお話にもありましたように、どちらかという市町向けのレポートになります。もうひとつは、資料2の「平成23年度版ごみゼロレポート（案）」で、県民向けになります。この県民向けのごみゼロレポートについても皆さんから忌憚ないご意見をいただいて、修正すべきところは修正して、発行に持っていきたいという、この二つの議題でございます。

限られた時間でございますが、それぞれご検討いただきたいというふうに思っています。点検・評価、PDCAというお話がありましたけれども、評価する際の基準というのは、もうまさに皆さんのお立場で評価いただければと思っております。後ほどまたご説明申し上げますが、資料1については特に評価の部分、斜字体でしかも下線が引いてあるところを中心に皆さんからご意見をいただければというふうに思います。

では、早速、議事のほうに入りましょうか。資料1の説明からお願いします。

（事務局）

- 資料1説明 -

（岩崎委員長）

「第6回点検・評価（案）について」説明をいただきました。特にこの斜字体で下線が引いているところが評価の部分です。今、こういう形で一応評価をしてありますけれども、ここを中心に皆さん各お立場からどうぞご意見を、それからデータについて「この部分はどうなっているの？」というようなことも含め、ございましたらぜひご発言をいただきたいと思っております。

いかがでしょうか。この「ごみゼロ社会実現プラン」のそもそもの認知率がこのように下がったというのは、なぜでしょうか。何か思い当たることはありますか。

(事務局)

おそらく、平成 19 年度はプランができてまだ間もない頃で、テレビとかラジオを使って、PR をしていたのではないかと思います、正確には分析されていません。

(岩崎委員長)

ああ、そうですか。やっぱり下がってしまうと 90% 目標というのは辛いですね。

(事務局)

そうですね。ただ、昨年度の推進委員会でも話があったのですが、「聞き方に問題があるのではないかと」と。県民アンケートのときに、ただ単に「ごみゼロ社会実現プランを知っていますか？」と聞かれても、「それは何？」みたいなことになりますので、「県では、ごみゼロ社会の実現に向けて、こういった具体的な取組をしています。」「それはごみゼロ社会実現プランというものがあって、それに基づき実施しています。」と少し説明書きを加えると相手もわかるのではないかと言われましたので、今回は、質問そのものは変えることはできませんが、その前に説明を加えて、県民の方に聞くようにしたいと考えています。

もう一つ、言葉だけで「ごみゼロ社会」の認知率を見た時に、それは結構知っているという率が高かったので、「ごみゼロ社会」というその言葉は分かっているのですが、「プランを知っていますか」と言うと、名前だけを知っていても「はい」と答えていいのか、内容までを知っていないといけないのか、そのへんもあって答えにくかったのではないかと感じています。

(岩崎委員長)

いかがでしょう。この斜字体の部分について。「生ごみがターゲット」という部分に尽きると言うか、そういう評価になるのかと思いますし、何と言っても県が一般廃棄物、ごみ処理については大きな権限を有しているわけではない中で、県の役割としては、モデル事業等の実施とその周知・啓発を通じて市町の皆さんの協力を得ながら、そしてNPO等のさまざまな団体、それから事業者の皆さんと協力して、ごみゼロ社会を目指していこうじゃないかと、そういうスタンスの点検・評価になっているということですが。

どうでしょうか、ご意見がありましたら、本当にそれぞれのお立場でお願いします。

(亀井委員)

昨日、松阪市で県主催の「ごみゼロフェスタ」に参加しました。そこで、私は、生ごみ堆肥化の講習会を行ったのですが、来ていただく人が本当に少なかったのです。こどもの城というところだったのですが、「みんなに来てもらうようにするにはどうしたらいいのか

な」、「たとえ1人の参加者でも講習をしていけばいいのかな」と思ったのと、もう一点、良かったことは、私は鳥羽市のリサイクルパークと同じ方法で生ごみ堆肥を作っていますが、手法の違う人たちと話し合いをする機会になりました。EM菌の人もいましたし、竹チップで生ごみを堆肥化するという人もみえました。みんなで一度話し合いをしようかということになりましたので、それはひとつプラスになったと思います。「松阪市管内のみんなでもっと話し合いをして生ごみをなくす方法を考えましょう。」というところは良かったと思います。

私は7年間小学校の生ごみ堆肥の講習に行っていますが、そこから先、子どもの親に全然つながらないのです。学校の先生方では、お二人退職された先生に、「私たちは家ですから教えてください」と言われたこともあるのですが、子どもたちの父兄のほうにつながっていかない。どうすればお母ちゃんたちにつなげられるのか、そこが一番難しい。だからお母ちゃんたちには、「生ごみ堆肥をせい!」ということには言わないで、子どもたちに、「冷蔵庫の中のお母ちゃんたちがスーパーから買ってきた物を捨てないように、お母ちゃんたちにちゃんと言ってね」といつも言うようにしています。それと、この「もったいない」という言葉だけは伝えるようにしているのですが、そこがものすごく難しいなと昨日感じました。

(岩崎委員長)

どうでしょう、今の話。出口委員、何かございませんでしょうか。子どもまででなかなか親に伝わらない。

(出口委員)

以前もお話がありましたが、生ごみ減量とかそういう環境教育をするのは小学校がいいかなと思うのですよ。例えば3年生、4年生ですと、地域教材と言って、地域に出て行っているいろいろなことを学ぼうというような内容がありますし、総合学習なんかの時間も含めて、ごみを減量する取組とか、生ごみを堆肥化する取組とか、そういう活動をしているという話を聞きます。

ただ、中学・高校になるとなかなかそういう時間が取れなくて、やはりカリキュラムの関係上、そのような取組をしている事例は、ほとんど聞いたことがないのが実態です。

自分の思いとしては、ごみゼロの取組が、果たして教員のほうに伝わっているのかなと。県の仕組みなど、国もそうですけど、環境省と文科省が個々に独立で行っていて横のつながりがないように、県教委と三重県環境森林部のほうが横の連携があるのかなと。そこら

がもしあれば、もう少し教員から学校としてごみの問題とか「もったいない」の取組とか、そういうことをもっと力を入れたらどうやというような形になってくると、もう少し取組が増えるんじゃないかなと思います。

私が思っているのは、学校で取り組めば必ず親も巻き込みますし、地域の人たちも巻き込みますし、未来の人間づくりという意味からもすごくいい場所なのです。しかし、現実には、それが学校でなかなか取り組む場面がないというのは、やっぱり教育のカリキュラムの中に確固とした位置付けで入れられてないのですよね。悪い言葉で言うならば、やってもやらなくてもどちらでもいいみたいなニュアンスがあるのですよ。

教職員の中でも、やはりごみ減量とか「もったいない」ということを何とか取り組まなければならぬという意識のある方がいれば、そこはやると思います。あるいは地域の中でそういう強い思いを持った方が学校に入ることによって、その地域のその学校ではごみ減量の取組とか生ごみ堆肥化のシステムができるのかなとは思っていますが、ただ、現状ではなかなかやりにくいのかなと思ってはいるのですが、何とかしていかないといけないとも思っています。

(岩崎委員長)

おそらく県としてごみゼロを推進していく際に考えられるのは、その辺りでしょうね。教育の部分と、ごみの減量であるとか「もったいない」という話を学校現場、それから地域社会にどうやって伝えていけるかという、その接点にあるのは、僕は県だと思っています。それは、生ごみの減量のごみゼロに向けての最大のポイントだという時に、それを実現するための手法の一つとして、やはり教育委員会との接点を県レベルでちゃんと持っているというのはあり得るのかなと思いますよね。

だから教材の開発の話もあるだろうし、三重県の小・中学校については「ごみゼロ」、「もったいない」というのをきっちりと位置づけるぐらいの話ができるかどうかですね。それはあるのかなと思いますね。

(亀井委員)

松阪市のことを言うのもなんですが、今、松阪市長が一番に取り組んでいるのが、各地域が主体になって行動するということです。昔の中学校区とか小学校区をひとつの単位として頑張ってみるので、私は今年、松阪市が変わるとしたら、その地域コミュニティでいかに生ごみを主体にしてごみ減量化に取り組むかだと思っています。そのためには、何かひとつを競争させればいいわけですよ。この地域はこれだけできたよとか。何か競争

させる方法を、思いつかないのですが、例えば、何とかしてこの地域でお互いに切磋琢磨して少しでもごみが減らせたなら表彰するとか、何かひとつでもいいから、変えたいと思うので、今が市長を動かす時期かなと思っています。今度、松阪市のごみの会議がありますので、そこでもう一度言おうかとは思っているのですけど。

(岩崎委員長)

そうですね。もうひとつ、三重県内で特徴的な動きは、伊勢もそうだし、それから伊賀も名張もそうですけど、だいたい小学校区単位にひとつの小さな自治会中心だけど、自治会以外にもいろいろなNPOも含めた地域協議会みたいなものを作って、そこで地域の課題を解決していこうというのは、三重県内でかなりいろいろな形で取り組みが始まっています。松阪も今一生懸命やっている。

そういう中で、「もったいない」の話と、それから生ごみの話というのは、点検・評価にも事例がありましたが、安否確認を兼ねて生ごみを出すという、ああいうようなやり方というのは、いろいろなところで参考になるだろうと思います。

(片野委員)

先ほど小学校の話があり、地域で競争させるというような話もありましたが、私が小学校に丸3年ぐらい毎日のように通い続けていた時期に、その時は5年生を対象にしていたのですが、その当時、三重県環境保全事業団で環境への取組の発表会というものがあった、それに学校の1クラスが応募して、子どもたちが1年間の取組をパワーポイントを使って大人たちの前でプレゼンテーションをしました。堆肥を作っている場所があまりにも粗末で、長靴とかスコップ等も一切なく、みんなで持ち寄って学校の備品としてやっていたのですが、その発表会では賞金も出ていて、たまたまその賞が取れ、賞金をもらうことができたので、学校の先生にちょっとした堆肥舎を作っていただきました。例えば、県の職員の中で堆肥化に精通した方を養成するなど、学校を競わせる仕組みみたいなものを作られたらいいのではないかと、やりながらそう思っていました。

またちょっと別の話になりますが、この土曜日に津のごみゼロネットワーク事業として、収穫体験をやらせていただきました。来ていただいた方は皆さん結構知識としては、たくさん知ってみえて、たくさん本を読んでいたり、雑誌を読んでいたり、講演を聞きに行ったりしているのですが、その時に堆肥を作る場面や熟成がどのようになっていくのかということをお見せしましたら、やはり実際に見たら全然違うなというふうにおっしゃってみえました。

その前に講演があったのですが、その講演は別の方がされていて、来場者の方は講演を聞く時間よりも、実際に堆肥が温くなるのを手で触ったりする、そういった時間をもっとたくさん作ってほしいとも言われていましたし、感じたことをそのまま人に話すほうが、すごく話しやすくなるとも言われていました。その後、収穫体験のほうをさせていただいたのですが、そうすることによって実際「このような形に変わっていく」ことを体感していただくことが理解する一番近道じゃないのかと思いました。

(岩崎委員長)

具体的な進め方についていくつかお話がありました。

いかがでしょう。生ごみの話や教育の話等が出ていますが、まずは評価をしていかないといけないわけですが。

(西村委員)

資料には「資源としての再利用率」という言葉が出てきますが、これは、例えば我々事業者がやっている食品残さのリサイクルであるとか、あと店頭回収のペットボトルとか発泡トレイなどはカウントされませんよね。この率の分母というのは、行政が把握している排出したごみ、そしてリサイクルしたごみという解釈ですよ。ですから、我々がやっている部分はこれには入っていないという認識でよろしいですね。

(岩崎委員長)

そうですね。公共に係わる部分の話になってしまいますからね。

(事務局)

あくまでも行政が回収したものです。

(西村委員)

そこで「目標を大きく下回った」と出ているのですよ。我々がお隣の三功さんとやっている食品残さのリサイクルや、店頭で回収しているリサイクルもだいたい二桁で毎年上がっています。特に発泡トレイなどは、透明トレイの回収を始めたこともあって、本当に大きく数字が変わっています。ですから、ここで資源としての「目標を大きく下回る」と記されているのは少し納得がいきませんね。

(岩崎委員長)

そうですね。本来のリサイクルの趣旨から行けば、そうやって行政の関与ではなく、店頭回収であるとか、民間の方向に行くほうが本来ではあるわけです。

(西村委員)

だから我々事業者も回収した量の報告はできるのです。ただ、元がどれくらいあるのかが分からない。

事業者側としてこういうリサイクル活動というのはどんどん進めておりますので、また今後も増えていくと思います。

(岩崎委員長)

そうだと思います。そこで、事業者としてリサイクルをやっていただければやっていただくほど、公共の部分は減って行く部分というのはあるはずですからね。ここをどういうふうにデータで見せるか。

(金谷委員)

可能なことをやったらいいと思います。今の西村委員のお話で、集められた量は把握されていますよね。だからそれでいいと思います。事業者の方が現にそれほど苦労されなくても、業務で把握されている量がどれくらいあるのか、そのものを行政で把握されたいのです。

ですから、資料1点検・評価の表現としては、9ページの「評価と課題」のところの(5)の「ごみ処理に伴う環境負荷の抑制に関する目標」とありますよね。ここでは主に温室効果ガスのことが書いてありますけれども、今おっしゃったように、これを読んだ時に資源としての再利用とかそういうところは、行政が回収している部分しかそもそも想定していないのだということが分かりにくい。実際にそういうことを承知していないと分かりません。ですから、そういう民間で取り組まれていることについても、その状況の把握等を今後進めていく必要があるということを入れたほうがいいのではないかと思います。

あと、いくつか気になる部分があって、10ページの下の事業系ごみの料金の値上げについてのところですが、これらから推定すると、「10%の値上げで概ね1%の減量効果が見込まれる」というのは、ちょっと表現としてどうかと思います。

この表現では、次ページのグラフで言うと、値上げ率ゼロで削減ゼロ。100だと10で、300で30になる、直線になるということですから。かなりばらついているので、この表ではならないですね。ここの表現としては、下から3行目のところで、「3～36%の減量効果があり、ばらつきはありますが」というのを入れたうえで、「～傾向があります」ということにしたらどうでしょう。削減率について、あえて入れるとすると、その後のカッコ付きで、例えば「値上げ率50%で約6%の削減率」とか、11ページの表で比較的相関関係の

あるところの数値の平均的なものを書いておく方がいいと思います。そうしないと、これだけ見ると、これを読んだ人は値上げ率が10%で1%の削減だから、100で10とか、そんなふうに当然考えるわけですね。それはちょっとまずいと思うのです。

ですから、「ばらつきはありますが」というのを前に入れて、最後の1文は取ってしまって、括弧付けで11ページの表から、数字のそのままの平均をいくつか入れるほうが、多分誤解されないと思います。

あと、19ページの指定ごみ袋制度のところですが、このままの表現だとここを読まれた県民の方が、指定ごみ袋制度を何のためにやっているのかが分からないと思います。ですから、自治体、市町によって若干違うかも知れませんが、多くの場合、ごみ収集をされる方の労力の点でもものすごく大きいもので出されるとしんどいとか、あとは破れやすい、破れにくいとか、いろんなことがあると思うのですが、例えばここに出ている松阪市さんだけでもいいので、何のためにやっているのかということ、少しでも書かれたほうがいいのかと思います。それはいくつかの市町について書かれてもいいですし、どこかの市町についての表現をそのまま使ってもいいのですが、そうされたほうがいいと思います。

もうひとつ、もし把握されていたら教えて欲しいのですが、点検・評価の後の参考資料の5ページ目で、資料3の「フリーマーケットの開催状況」というのがありますが、フリーマーケットの来場者数というのはどのように把握しているのでしょうか。もし、ご存知でしたら教えてください。

(事務局)

これは、各市町に対していろいろな項目と一緒にフリーマーケットの実施日、会場および参加者数、そして市町はフリーマーケットに対してどのような立場にあったのかということを表にし、そこに記入していただいた数値を入れていますので、市町のほうで全部担当しているのか、あるいは大きなイベントの中の一部でフリーマーケットをしていて、だいたいこれぐらいかなという想定の部分もあります。

(金谷委員)

例えば四日市だとかなり細かく出ているのは、これは何かあるのですか。

(事務局)

多分カウントしていたのだと思います。

(岩崎委員長)

ドームですから、多分受付のところですね。

(金谷委員)

分かりました。

(岩崎委員長)

よろしいですか。

どうでしょうか。他に…。

森岡委員、市町の立場で言うと、この評価についていかがでしょうか。

(森岡委員)

生ごみの減量化について、鳥羽市とか名張市は非常に熱心にやられていて、我々も見習いたいところですよ。志摩市では生ごみ処理機を購入している人には3万円上限で2分の1の購入助成の制度があります。ここ3、4年は減少傾向になっていて、市民の認知度を上げるのに、私どもも市の広報などで生ごみの減量化にハッパをかけているようなところがあるのですが、なかなか正直、伸び悩んでいます。

あと、事業系の生ごみの減量に取り組みたいと考えています。家庭の生ごみは、食品残さは昔と違って出さないような気がするのですが。皆さん、家庭で料理をするのに米や野菜をそんなに余らせますかね。そんなに無駄遣いを今はしないと思うのです。使いもしないキャベツをいっぱい買ってきたりとか…。

ただ、事業系のごみは、レストランや料理屋、大きいところで言うとスペイン村とか合歡の郷とかがありますが、そのあたりはやはり食品残さが出ていそうな気がします。そこを減量化したいと考えています。私はこの4月から美化衛生課の課長ですが、昨年も事業者には事業系生ごみ減量化を推進するために、家庭用の数万円の機械とかではなく、もっと大規模な処理機の購入を打診したのですが、市が100%もつわけにはいきませんので、なかなか事業者も二の足を踏み進めにくく課題になっています。何とか事業系生ごみを減量化するために有効な手法はないか、知恵を絞っている状況です。

市議会議員からも一般質問等で意見がたくさん出ていて、とにかく水分を抜く装置とか、生ごみについての質問を受けたりして、我々も研究しているのですが、なかなか鳥羽市や名張市のように実現までには至っていないところです。

(岩崎委員長)

このような鳥羽市の事例を普及させることは、ひとつ啓発としてあり得ると。

(森岡委員)

そこは研究段階で、先進事例を見てという状況です。

(岩崎委員長)

ありがとうございます。

今日の意見も含めて、それからまた改めて、後ほど何日頃までに意見があればというように。

(事務局)

あまり時間はないので、今週中ぐらいを目途に考えています。

(亀井委員)

この点検・評価の話と少し違うのですが、市町では先ほど言われました生ごみ処理機の助成をしてみえますが、あとの追跡調査はどこもしていないのがすごく気になります。3万円ものお金を出しているのに、何でその追跡調査をしていないのか。使用されていないのだったら助成を止めるとか、何かそのところをもう少し市町に言っていただいて、追跡調査をするとか、何か助成後の支援がないのかということです。昨日も私が「ごみゼロフェスタ」に参加した時に、「グリーンのコンプストを使っているのですが、虫が湧いて仕方がないのです」という質問があって、「このようなやり方をされたらどうですか」と言ったら、「誰も教えてくれませんでした」とおっしゃる方がみえました。ただ、これだけどうぞと、会社のパンフレットをもらっただけでは何ごともうまくいきません。今度、松阪市でも、コンポストだったらコンポストの講習会を、生ごみの機械だったら機械の講習会を開いてくださいとお願いしたのですが、そのような、ただ「あげたらよし」という物の考え方をもう少し改めて欲しいと思います。

(森岡委員)

生ごみ処理機の購入助成をした後の使われ方がどうなのかということは、志摩市の議会でもまったく同じ質問が出ました。志摩市は、平成16年に合併していて、それ以前のデータは整理されていなかったのですが、先月、平成16年以降に購入助成した世帯にアンケートを送って、今、回収状況が6割か7割です。ついこの間回収を締め切って、今取りまとめ中です。

(岩崎委員長)

参考にデータを、志摩市ではこういうことをやっているということで、ぜひ提供をお願いします。

(森岡委員)

また参考までにお示ししたいと思います。

(岩崎委員長)

堀田委員、いかがでしょうか。事業者の立場で。

(堀田委員)

資料1の80ページ「おわりに」のところで、前半の家庭ごみの有料化と生ごみや埋立ごみの資源化など、この二つが効果があったということはよくわかるのですが、後半の「もったいない」という活動、それと先ほど亀井委員が言われた、そういうものを子どもたちから大人への浸透を図るというところで、その下から何行目かに書かれているのですが、「県と市町が情報共有とか意見交換の場を活用して」という、ちょっと具体性がないというか、パンフレットを作って、じゃあどうするのという、その次の手のところが具体的ではないと思います。もしパンフレットを作っても、先ほどから言われているように人から次の人へ、共有するとどうしてもボケるので、そのあたりを今後どうしていくかということは、少し戦略的に考えないといけないのではないかという感じがします。

(岩崎委員長)

今、話も出ていましたが、県民向けのレポートの話も今日の議題としてあります。時間も限られていますので、後ほどまた全体にわたってご意見をいただき、それから二つについては今週中にまた改めてご意見をお寄せいただければということで、次のこの「ごみゼロレポート」について説明していただきたいと思います。

じゃあ、説明のほうをお願いします。

(事務局)

- 資料2 説明 -

(岩崎委員長)

いかがでしょう。県民向けのパンフレットですが。

資料2の14枚目から17枚目のモデル事業の表は、平成17年度から22年度のもの、年度別ではなく生ごみは生ごみといった分類で揃えたほうがいいのかもかもしれませんね。年度別にするのであれば、この色は何かというのはちゃんと記載してください。そういう修正を含めて、まだ改良していただけるとのことですが、この際、これをご覧いただいてご意見がございましたら、ぜひお願いしたいと思います。

(金谷委員)

4枚目の「三重県のごみの現状」の「ごみの資源化率」のところですが、ここで何点か意見があります。一つはこの「ごみゼロレポート」では、「この数値については行政が回収

したものを対象にしています」と明記してあるのですが、「点検・評価」にはどこにも書かれていないので、これは「点検・評価」にも入れたほうがいいですね。

二つ目は、この「資源化率」という言葉が、国で使っている「資源化率」と三重県の「資源として再利用率」との違いが書いてあるのですが、この「資源化率」の定義をどこかで書いたほうがいいと思います。「点検・評価」にも書いてないので、書いたほうがいいと思います。

三つ目は、「資源化率」のグラフの説明「 1」で、「資源化率」には含まれているけれども、「資源としての再利用率」には含まれていないものとして を挙げていますね。これが概ねどれぐらいのパーセントなのかということを書いてほしいと思います。それは「点検・評価」を見ても分かりません。「点検・評価」参考資料 13 の細かなごみフローを見ても分からない。それはやはりどちらにも入れるべきだし、関連して、「点検・評価」8 ページにサラッと書いてある、「平成 23 年度から溶融処理の灰を民間処理に移行」とありますよね。これは結構大きなことです。今回の「点検・評価」は、平成 22 年度までのことが書かれていますので、悩ましいところでしょうが、ただ、県民の皆さんに読んでもらう時に、国の目標値、指標と同じもので評価した時には、これによってガラリと変わるはずですよ。ですから、そこはこの「ごみゼロレポート」 「 1」に書いてある今の説明の部分に、それぞれのウェイトがどれぐらいの割合なのかということを追加したものを「点検・評価」にも入れたほうがいいと思います。

最後に実態として教えて欲しいのですが、「点検・評価」の本文の表現でもう少し詳しく書くべきだと思うのですが、「今年度から民間処理に移行」というのは、どういうことですか。事業団で焼却残渣を溶融していたのを、止めて、事業団へ持ち込んでいた市町は、それぞれの市町の判断で処理していると。そういうことでいいのですか。

(事務局)

県がマッチングをして、灰を溶融してもらおうところを探して、組み合わせして行っているようになっています。

(金谷委員)

では、実施主体は事業団から他が変わっているけれども、この溶融処理自体は引き続き行われているということですか。

(事務局)

資源化ということでは変わっていません。溶融かどうかは分かりませんが、資源化され

ていることは間違いありません。

(金谷委員)

それだったらやはりもう少し詳しく書くべきでしょう。移行というのは秘密のことで何でもないわけで、それは、「適切な処理体制」とか曖昧な表現ではなく、どのようになっているのかということ、つまり県民の皆さんが見た時に、今まで溶融処理をしていた市町がどこで、今後どうなるのかを分かるようにしていただきたいと思うのです。

(事務局)

市町の名前も、ということですか。

(金谷委員)

本文じゃなくても、例えば後の資料のほうでもいいのですが、資料の各市町の四角があるじゃないですか、あそこの備考のところにも、何かどこかにやはりあるべきだと思います。なぜなら県全体でやっていることで、県が今までやっていたものを変えているわけですね。そういうことを書くのが「点検・評価」ではないですか。やはりそのことが分かるように書かないといけないと思います。この「点検・評価」は平成 22 年度までの実績ということですか。

(事務局)

平成 22 年度末ということですか。

(金谷委員)

平成 23 年度の話であっても、現に出る段階で大きく変わったことがあるわけですから、そこについてはやはりもっときっちり書かれないといけないと思います。これは、県として、県民に対してしっかりと情報を提供するという本来の趣旨に反するのではないかとと思うので、それを、例えば指標として「資源として再利用率」には「こういう影響があります」というようなことを書かれたらいいと思います。これらの対象になっている市町名も併せて記載し、できればなぜ事業団からこのような方法に変えたのかということも書くべきです。多分赤字だったからでしょう。

(河合総括室長)

事業団から民間へ移行したのは、基本的には、当時はそういう焼却灰の処理について、施設も技術もなかったのですが、現在では民間にそのような受入施設ができてきたということ、それと実際にその処理の委託料金についても、民間のほうが比較的安く対応できるという状況になってきたという二つの理由からです。

(金谷委員)

それを「ごみゼロレポート」にも「点検・評価」にも当然書かないといけないと思えますよ。今聞いていると、今年、今年度ですね。県内のそういう廃棄物処理の一番とは言いませんが、少なくともいくつかの大きな出来事のひとつじゃないのですか。

(岩崎委員長)

ありがとうございます。

「点検・評価」についてもご意見をいただきました。それに対応してください。

こちらの「レポート」ではどうでしょうか。他にご意見はございませんか。

こうして見ると、関係者のインタビューで軽く気軽に読めるところと、さっきのモデル事業のようにガチガチに書いてあるところと、かなり落差がありますよね。ここはもう少し見せる工夫があってもいいのかも知れませんね。

いかがでしょうか。何かお気付きのことございますか。

先ほどと同様に、今週中ぐらいだったらまだ間に合うのですか。

(事務局)

レポートのほうはもう少し余裕があります。

(岩崎委員長)

まあ、こういうのはある程度期限を切っておかないといけないですから。今日、改めて読んでみて、こういうところをもう少し変えておいたほうがいいのか、ここについては、先ほど金谷委員からご指摘があったように、もう少しちゃんと説明しておかないといけないとか、そういうお気付きの点がありましたら、ぜひ今週中ぐらいに事務局にお申し出いただけますでしょうか。メールあるいは電話ということをお願いしたいと思います。

どうでしょうか、この「点検・評価」の案と「ごみゼロレポート」、二つを通じてこの際特にという発言はございますか。

どうでしょうか。

今日の議論は私のほうでまとめるという話ではないかとは思いますが、やはり「生ごみを主体にこれからやっていかないといけない」ということがはっきり分かるようにはしたいと思うのと、それから先ほどもありましたが、「もったいない」の話を事務局でどのように普及していけるのかは、少し検討を進めていかないといけないでしょうね。

(河合総括室長)

最初に議論していただいた生ごみの件ですが、家庭系と事業系の生ごみが一番の課題だというのは認識しています。その中でもやはり「もったいない」ということを教育の現場とどのようにして連携してやっていくのか、それについては、今年、うちのほうで「もったいない普及啓発事業」ということで、市川委員の食生活改善推進員の皆さまに協力いただき事業を進めています。教育委員会、あるいは先生方とまず小学校4年生を対象とした、食を中心とした「もったいない」というタイトルの教材を作ろうじゃないかと考えています。それを作って、来年度はそれぞれ、今、県民センター単位を考えていますが、県民センターごとでモデル校を選定して、活用いただくことを考えています。そこで、そういう授業を行っていただく、「もったいない名人」、そういう方たちを講習・研修を行って養成し、小学校4年生で何校か実施させていただこうかと。その次には、県内の全校でその取組を広げていきたいということで、いろいろご協力をいただいて進めているところです。

事業系生ごみにつきましても、リサイクルループということで、生ごみを出している販売店であるとか、それを堆肥化する事業者、その堆肥を使って生産を行う農家、この三者でループを構築し、できた生産物を県が認定製品という形で認定し、事業系生ごみの削減ができないか、取組を進めているところです。なかなかその参加いただける事業者など、いろいろと難しいところがありますので、組み合わせをどうしていくのか、どう仕組んでいくのか、そこらあたりを検討しているところです。

ですから、認識的には今日お話しいただいて、ご指摘いただいた家庭系生ごみ、それと事業系生ごみ、あと教育現場について、委員の先生にご指摘いただいた部分は認識を持っておりますので、またよろしくお願いします。

(岩崎委員長)

河合総括室長もおっしゃったけど、地域のそのような単位で、組織みたいな、そういうところもあり得るんじゃないかなと。

いただいた時間がほぼ尽きてきておりますけれども、じゃあ、全体を通じてということで改めてご意見をいただければということにいたしまして、「その他」の事項について何かございますか。

(事務局)

すみません。勝手に言いますが、今週の金曜日までにファックスかメールでご意見をいただけないかと思っております。

なぜ急いでいるかと言いますと、毎回「点検・評価」は、県議会のほうにもお示しさせていただいているところでありまして、その印刷等の兼ね合いもあり、勝手に申しますがよろしくをお願いします。

(岩崎委員長)

それでは、委員会については以上で終了させていただきます。

(事務局)

岩崎委員長、議事進行をありがとうございました。

本日はどうもありがとうございました。

(終)